

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00413

研究課題名（和文）リスク感覚の多元的表出と生存の詩学 大加速への文学的応答の研究

研究課題名（英文）Pluralist Risk as Feelings and the Poetics of Survival: Literary Responses to the Great Acceleration

研究代表者

結城 正美（Yuki, Masami）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：50303699

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）： 進歩主義のもとで減衰を余儀なくされている「生存の文化」（ジョン・バージャー）を参照枠として、数値化・数量化されない「リスク感覚」の文学的表出を考察・分析し、(1)「生存の文化」を映す文体の過剰さとその現代的意義、(2)都市のなかの自然（アーバンネイチャー）の潜在力、(3)技術圏における多種との絡まり合いの相貌、(4)レシプロシティにみる「生存の文化」の湧現、について明らかにし、そうした本研究を基礎にして、環境人文学の組織的動きの創出に貢献した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

原発事故や気候危機をはじめとする環境問題をテーマ（あるいは背景）とする文学作品に、確率論的手法では捉えられない不安や割り切れない気持ちといった「リスク感覚」が滲んでいることを明らかにした本研究は、人間ならざるものを含む他者との共感的関係の構築における文学的想像力への学術的・社会的関心を高めることに貢献するものである。また、地球環境問題が深刻化し従来の価値観の見直しが求められているなか、本研究は、個人的・社会的思考の再調整における文学の役割を立証したことで、他者と共生する社会の有り様を具体的に考えるための一つの手掛かりを与え、その点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Abstract (1000 letters)

This research analyzes pluralistic literary expressions of what risk scholars refer to as “risk as feelings,” which is not usually included, if not ignored, in a conventional, progressive notion of risk. Drawing connections between risk as feelings and what the Marxist art critic and writer John Berger called “a culture of survival” (as opposed to a culture of progress), this study discusses (1) a Thoreauvian extravagant literary style as a modern manifestation of a culture of survival, (2) the decentralizing potential of an idea of urban nature, (3) aspects of multispecies entanglement in the Technosphere, (4) an emergence of an updated culture of survival in a notion of reciprocity. Based on its analyses, this research also contributes to the organizational movement of Environmental Humanities in Japan.

研究分野：アメリカ文学、環境文学

キーワード：エコクリティシズム 環境文学 リスク ネイチャーライティング 人新世 環境人文学

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は文学研究とリスク研究の相補的關係に着目して構想したものである。リスク研究においては、「数量化可能なリスク」と「数量化することのできない不確実性の世界」との隔たりに着目するなど、従来「リスク」と一括りにされてきた概念を見直す動きがあった。他方、文学研究においては、間接的にリスクにかかわる事象や情動を取り上げた研究が「近代」や「伝統」といった概念を軸として進められていたが、そうした動向はリスク感覚と関わりがあると申請者は考えた。

以上、リスク研究と文学研究の双方において多角的にリスク社会を考察する必要性が示唆されていると考え、文学研究の見地から本研究課題を設定した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、確率論的思考によって捉えることの難しい、いわば個々の価値観と深くかわるリスク感覚を、文学研究の見地から明らかにすることにあった。リスク感覚は、数値化して表される確率論的事象としてのリスクとは異なり、客観的に表すことが難しい。たとえば、核問題に関して、放射能に関するリスクが数量化されるのに対し、人々の不安や割り切れない気持ちは客観的に説明することが困難である。しかし、「不安」や「割り切れない気持ち」としてのリスク感覚は、数値に還元され得ず、論理的説明から漏れてしまうからこそ、イメージやナラティブに埋め込まれていると考えられる。

以上のことから、リスク感覚がどのような言語空間に表出し、そこでは何が問題化されているのか、といった問いを立て、リスク感覚の多元的な表出を分析することを通して、そのような多元性が現代社会に対してもつ示唆を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

以下の二つの課題を設定し、作品読解と資料・文献調査に基づいてリスク感覚の多元的な表出の考察と分析を行った。なお、個人研究であるため、国内外の学術会議での研究発表および情報収集を通して、定期的に自己点検を行いながら研究を進めた。

#### (1) 課題1: 「生存の文化」を参照枠とし、リスク感覚を表現形式の見地から分析する。

大加速のさなかにある1970年代前半にイギリスの作家・美術批評家ジョン・バージャーが提示した「進歩の文化(culture of progress)」と「生存の文化(culture of survival)」という概念を参照枠とし、「進歩の文化」が台頭する大加速時代における進歩主義への不安や割り切れない気持ちを「生存の文化」あるいはその痕跡と位置づけ、主に現代アメリカ作家の作品におけるリスク感覚の表出を分析する。

#### (2) 課題2: 生存をめぐるリスク感覚に関する批評方法を洗練させる。

大加速への文学的応答を近代批判という枠組で捉えることは主義主張の不毛な応酬に陥る危険性を伴うという認識に立ち、イズムに回収されない形で大加速時代のリスク感覚を考察する理論的手法として、ロゴスとエロスのせめぎ合いならびに「生」概念(ピオスとゾーエー)に着目し、リスク感覚と生存の詩学を議論するための批評方法を洗練させる。

#### 4. 研究成果

進歩主義のもとで減衰を余儀なくされている「生存の文化」を参照枠として、数値化・数量化から漏れ出るリスク感覚を考察・分析し、主に以下のことを明らかにした。

##### (1) 「生存の文化」を映す文体の過剰さとその現代的意義

自然擁護の文章として読まれがちなヘンリー・D・ソローの作品が、単に進歩主義を批判しているのではなく、人間と人間ならざるものとの相互交流にもとづく感受性を際立たせ、それによって進歩主義の見直しを迫っていることを、社会的慣習(あるいはロゴス)を超え出るソローの過剰な文体に着目して明らかにした。社会的慣習の外部を指向する文体の過剰さは、「生存の文化」の痕跡として解釈することができる一方、そうした特徴は進歩主義を自明とする社会では理解されにくい。しかし、あるいはだからこそ、文学研究が学界のみならず社会に向けて発信することが重要である。そのような認識のもと、ソローの影響を受けた現代ネイチャーライティングをはじめ文学作品の文体の過剰さが、文明論と結びつくことを指摘した。

##### (2) 都市のなかの自然(アーバンネイチャー)の潜在力

リスク概念は往々にして危険/安全という二項対立的発想にもとづいているが、この二項対立は都市/自然を分け隔てる思考と関連があることを、ロサンゼルスを舞台とするカレン・テイ・ヤマシタの小説などをもとに考察し、それによって、都市の土着民たる路上生活者にみる生存の文化を明らかにした。そして、アーバンネイチャーに生存の文化の痕跡を見出す見地が、他の文学作品にも適用可能であることを示した。

##### (3) 技術圏における多種との絡まり合いの相貌

生存の文化への着目は過去回帰的なものではなく、AIとの共生が取り沙汰される現代(技術圏)の問題である。リチャード・パワーズの小説においてAIが生態系復元に重要なはたらきを有することに着目し、19世紀のソローや20世紀前半のアルド・レオポルドの見解をアップデートする形で、技術圏におけるマルチスピーシーズ(多種)的感性に向けられた文学的想像力を明らかにした。これは、AIをめぐるリスク論とも関わる議論であると認識している。

##### (4) レシプロシティにみる「生存の文化」の湧現

現代における生存の文化の痕跡が「レシプロシティ」という概念に見出せることを、植物学者でネイチャーライターのロビン・ウォール・キマラーの作品を通して考察した。先住民文化の伝統知と近代科学の学知を撚り合わせ、両者の間に知の類縁関係を築くキマラーの手法は、人間の知を相対化する「人間以上(モア・ザン・ヒューマン)」の見地にもとづくものであり、それゆえキマラーの提唱するレシプロシティという概念ならびに実践には脱人間中心主義の具体的なありようが示されている。この点は研究期間終盤に見出したことであり、本研究を発展させる形で構想した基盤研究(C)(2024~2027年度)で研究に従事する。

##### (5) 環境人文学への貢献

本研究は狭義の文学研究に終始するものではなく、人文学諸分野と協働する「環境人文学」(Environmental Humanities)の一実践と位置づけられ、この点において当初の想定以上の成果があった。本研究を基礎として、青山学院大学にAGU環境人文学フォーラムを設置するなど、組織的な動きにつなげることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>結城正美                         | 4. 巻<br>1198       |
| 2. 論文標題<br>技術圏のレシプロシティー―土地をめぐる環境人文学的考察 | 5. 発行年<br>2024年    |
| 3. 雑誌名<br>思想                           | 6. 最初と最後の頁<br>5-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>結城正美                         | 4. 巻<br>1183       |
| 2. 論文標題<br>正常の終焉、思考の再調整―環境人文学への誘い      | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>思想                           | 6. 最初と最後の頁<br>8-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>結城正美                            | 4. 巻<br>94            |
| 2. 論文標題<br>ネイチャーライティング再考―人新世をめぐる想像力に向けて   | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>英文學思潮                           | 6. 最初と最後の頁<br>155-172 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.34321/22132 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）     | 国際共著<br>-             |

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>YUKI, Masami  | 4. 巻<br>25         |
| 2. 論文標題<br>Eating Contamination in Japan's Anthropocene Fiction | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>文学と環境   | 6. 最初と最後の頁<br>5-15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-          |

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Yuki, Masami  |
| 2. 発表標題<br>Thinking Like a Mountain, Yes, But What About a Tree or Even Uranium? |
| 3. 学会等名<br>Colby Summer Institute in Environmental Humanities (国際学会)             |
| 4. 発表年<br>2023年  |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>結城正美                      |
| 2. 発表標題<br>The Overstoryにみる技術圏の 緑の思考 |
| 3. 学会等名<br>日本英文学会第95回全国大会            |
| 4. 発表年<br>2023年                      |

|                                |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名<br>結城正美                |
| 2. 発表標題<br>いま、環境人文学について考えていること |
| 3. 学会等名<br>AGU環境人文学フォーラム       |
| 4. 発表年<br>2022年                |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>結城正美  |
| 2. 発表標題<br>「いつまでも地球のお客さん気分がいちやいけいない」ーRichard Powersの小説The Overstoryのアクティヴィズム |
| 3. 学会等名<br>第55回青山学院大学英文学会大会  |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>結城正美                                |
| 2. 発表標題<br>人間以上（モア・ザン・ヒューマン）の知のほうへー環境人文学の現在と課題 |
| 3. 学会等名<br>金沢大学グローバルレジリエンス研究部門 第1回研究会（招待講演）    |
| 4. 発表年<br>2023年                                |

|                          |
|--------------------------|
| 1. 発表者名<br>結城正美          |
| 2. 発表標題<br>廃棄と祈り         |
| 3. 学会等名<br>AGU環境人文学フォーラム |
| 4. 発表年<br>2021年          |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>YUKI, Masami  |
| 2. 発表標題<br>Thinking Like Uranium: Planetary Imagination Toward Nuclear Waste |
| 3. 学会等名<br>ANEST International Online Workshop（国際学会）                         |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>YUKI, Masami  |
| 2. 発表標題<br>Redefining survival in the Anthropocene: literary and artistic interventions on nuclear waste disposal issues |
| 3. 学会等名<br>STREAM: Transformative Environmental Humanities (KTH)（国際学会）   |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>結城正美                     |
| 2. 発表標題<br>A.I.との未来ー 『クララとお日さま』を中心に |
| 3. 学会等名<br>ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会   |
| 4. 発表年<br>2021年                     |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>YUKI, Masami  |
| 2. 発表標題<br>Towards a "Culture of Survival" in the Anthropocene: Agency and Scale in the Work of Ishimure Michiko |
| 3. 学会等名<br>The 7th International Symposium on Literature and Environment in East Asia (国際学会)                     |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>結城正美                      |
| 2. 発表標題<br>石牟礼文学にみるヒトでないものたちとの共生     |
| 3. 学会等名<br>日本平和学会2021年度秋季研究大会 (招待講演) |
| 4. 発表年<br>2021年                      |

|                            |
|----------------------------|
| 1. 発表者名<br>結城正美            |
| 2. 発表標題<br>環境をめぐるストーリーテリング |
| 3. 学会等名<br>青山学院大学英文学会大会    |
| 4. 発表年<br>2021年            |

〔図書〕 計1件

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>結城正美                   | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>岩波書店                   | 5. 総ページ数<br>223 |
| 3. 書名<br>文学は地球を想像するーエコクリティシズムの挑戦 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|   |
|---|
| 青山学院大学 AGU環境人文学フォーラム<br><a href="https://www.agu-environmental-humanities.com/">https://www.agu-environmental-humanities.com/</a> |
|---|

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|